

修士論文要旨

(特定課題)

看護学専攻	広域看護学分野 精神看護学領域	学籍番号 218604 氏 名 正野 温子
論文題目	救命救急センターに搬送された自殺企図後の患者に対する 再企図予防のための介入に関する文献検討	
キーワード	自殺企図、救急、コンサルテーション、態度、ケースマネジメント	
<p>【目的】 本研究は、救命救急センターに搬送された自殺企図患者への看護や危機介入に関する先行研究を系統的に収集し、統合することによって、患者に対するケア及び救急部門の看護師が自殺企図患者の対応時に抱く認識や態度を明らかにすることを目的とする。また、その結果をもとに患者の再企図を予防する為のリエゾン精神看護専門看護師が実践するケアや、コンサルテーション活動について考察し、示唆を得ることも目的とする。</p> <p>【方法】 医学中央雑誌 Web 版 Ver.5、CiNii では、「自殺」「救急」「看護」「危機介入」をキーワードに検索した。文献選択の経過は、PRISMA(Preferred Reporting Items for Systematic Reviews and Meta-Analyses)声明のフローダイアグラムに沿って網羅的かつ系統的に収集し、21 件の論文を選定した。</p> <p>【結果】 再企図予防を目的に、情報収集し、ケアの提供と同時にケースマネジメントがなされていた。自殺企図患者に対して、共感的受容的に関わり、希死念慮の有無を確認し、安全を確保していた。家族や重要他者は、患者との関わり方や再企図するのではないかと不安を抱えており、救急部門の看護師は、家族も看護の対象としてケアを提供していた。救急部門の看護師は、看護師自身の自殺に関する価値観や、自殺に至る背景への理解、対応の経験によって自殺企図患者の捉え方が異なった。そして、自殺企図患者との関わりの中で、看護師は葛藤や陰性感情を抱いていた。通常とは異なる看護パターンに苦手意識や不安を感じ、自殺企図患者への看護に関する知識不足を認識しながら、患者と接していた。看護師には、再企図を予防するための積極的な行動、または回避的な行動をとる傾向があり、自殺企図患者に対する認知形成や態度傾向は、冷静に振り返る経験が変化をもたらす契機となっていた。</p> <p>【考察】 再企図を予防するために行なっている情報収集はバイオ・サイコ・ソーシャルモデルによる包括的な情報整理と、看護師の関わりは TALK の原則と一致していると考えられる。さらに、家族や重要他者へ関係調整を図り、精神科受診をすすめることは、自殺の危険因子を減少・改善し、防御因子を増強させる介入と考えられる。ケースマネジメントでは、救急医療体制の限界がある中、専門的治療へと橋渡ししていくため、院内連携・地域医療福祉機関との連携が重要であると考えられる。しかし、精神科領域と関連のある心理士や精神保健福祉士に対する認知が低く、連携において職種ごとの役割認識を日ごろから行うことが重要と考えられる。救急部門の看護師が認識している知識不足は、患者対応の困難感や不安、ケア遂行時の葛藤に影響している可能性が考えられ、患者に対する陰性感情がある看護師も患者－看護師関係を振り返る過程を経て、積極的な態度へ変容する可能性がある。専門看護師の役割として、その過程を支援する必要があることが示唆された。</p>		